蔣介石档案与台湾的蔣介石研究

講　師 ：呉　淑鳳　氏（台北国史館修纂処処長）

日　時：2010 年 6 月 18 日(金)　18:00－20:00

場　所： 慶應義塾大学三田キャンパス大学院校舎８階　東アジア研究所共同研究室１

言　語： 中国語（日本語通訳有り）

概　要：

第 4 回研究会では台北国史館修纂処処長の呉淑鳳氏を招き、近年に公開されデジタル化が進んでいる蔣介石档案について、その具体的な内容、使い方の心得、さらに答案を使った研究の最新動向に関する議論を行った。

呉氏はまず、いわゆる蔣介石档案には手紙、電文、日記（愛記、困勉記、学記、旅行記、省克記）、書簡、書籍や映像資料などを含み、台湾で保管・整理されてきた背景を解説した。そのうえで呉氏は、国史館のホームページを表示しながら 9 分野にわたる資料の内容を説明し、特に『事略稿本』と『蔣介石日記』について詳しく言及した。呉氏によれば両者には収録の際に生じた若干の違いがあり、『事略稿本』は 1937 年 7 月から 12 月および 1939 年の記録が欠けている。中央研究院近代史研究所が 2008 年に開催した会議では、蔣介石日記について台湾・大陸・米国の研究者からそれぞれ異なる評価が示された。すなわち、そもそも資料の多い台湾では歴史の解釈を補う資料として理解されたのに対し、大陸の研究者は「これまでの蔣介石の評価を転換する」と評価し、米国の研究者からも同様の見解が示された。また呉氏はスタンフォード大学フーバー研究所が『蔣介石日記』を公開してからしばらくの間、蔣介石研究ブームが起こったことを指摘した。

台湾の研究状況においては、①台湾政治大学が中心となっている蔣介石読書会（2007 年 10 月から）、②中央研究院近代史研究所の蔣介石研究群（2008 年 7 月から）、③中壢中央大学歴史研究所の蔣介石研究、の 3 つが中心的役割を果たしている。呉氏は、2005 年からは档案の利用が増えるに伴い、研究領域も従来多かった政治・外交だけでなく、蔣介石個人の心理面に対する研究や 1950 年代以降を対象とするものへと広がったことを指摘した。

質疑応答においては、個別の資料に対する質問だけでなく、資料公開を経て大陸における国民党・蔣介石の評価はどのように変化する可能性があるか、実際に進められている研究の具体的内容についてなど、研究動向にまつわる疑問が提起された。呉氏は、資料公開に伴い大陸での蔣介石に対する評価は変わってきているが都市部と内陸部での研究に格差があること、その要因として大陸から台湾の資料へのアクセスは制限されていることを指摘した。他方、50 年代以降の蔣介石研究においては白色テロなども分析対象となり、戒厳令や二・二八事件についても資料を利用した客観的な分析が進んでいると説明した。